

(イ) 事業実施区域周辺における小型コウモリ類の生息状況

事業実施区域周辺では、A、B、C、D及びEの5つの洞窟が確認されている。これらの洞窟の洞口と事業実施区域との位置関係を図-6.12.1.1(63)に示す。また、事業実施区域周辺のA～E洞窟において確認された小型コウモリ類の生息及び利用状況は図-6.12.1.1(64)、表-6.12.1.1(70)に示した。その概要は以下のとおりである。

全ての洞窟で小型コウモリ類の生息が確認された。利用時期は洞窟や種によって異なり、通年にわたる利用も確認されたが、一時的もしくは稀な利用も確認された。利用形態は出産・哺育や冬期の休眠場所ならびにこの他の時期の昼間の休息場所としての利用が確認された。

事業実施区域周辺のA～E洞窟の利用状況及び集団遺伝学的分析の結果から、石垣島のカグラコウモリの個体群にとってA洞窟やD洞窟は、冬期の休眠場所として島の南東部に存在するコロニーの中では非常に重要であることが示唆された。また、ヤエヤマコキクガシラコウモリの個体群にとって、A洞窟は島の南東部の個体群では中心的な出産・哺育場所であることが示唆された。リュウキュウユビナガコウモリはA洞窟を利用しているが、出産・哺育場所や冬期の集団での休眠場所としての利用は確認されず、また個体数の変動が大きかった。

a) A洞窟

ヤエヤマコキクガシラコウモリ：通年利用と判断できる（最大約2,200個体）。出産・哺育の時期に最大約2,200個体（幼獣最大約350個体）に、冬期の休眠時期に最大約1,100個体に利用されていた。

カグラコウモリ：通年利用と判断できる（最大約230個体）。出産・哺育の時期に最大約120個体（幼獣最大約50個体）に、冬期の休眠時期に最大約230個体に利用されていた。

リュウキュウユビナガコウモリ：通年利用と判断できる（最大約1,000個体）。出産・哺育場所としての利用は確認されなかった。

b) B洞窟

ヤエヤマコキクガシラコウモリ：通年利用と判断できる（最大約25個体）。これまでの調査で、一度だけ約150個体の利用が確認された。しかし、洞窟内には糞の堆積はほとんどみられず、新しい糞も少なかったこと、その前後の調査では多数の個体が確認されていなかったことから、一時的な避難場所としての利用であったと推察される。冬期の休眠時期に最大約25個体に利用されていた。

カグラコウモリ：一時的な利用と判断できる（最大3個体）。

c) C洞窟

ヤエヤマコキクガシラコウモリ：通年利用と判断できる（最大約270個体）。冬期の休眠場所として最大約270個体に利用されていた。しかし、C洞窟内には糞の堆積はほとんどみられなかった。本種は冬期にも夜間洞外で採餌する(Funakoshi and Uchida, 1978)とされ、また、西表島の大富第一洞で